

せ かい み き はなし 世界を見たがった木のお話

ある曲がりくねった小川のほとりの草地に、カシの若木が生えていました。そのそばには、優雅で堂々とした大きなカシの木が2本、そびえ立っていました。この小さな若木の名前は、スプリグスといました。スプリグスは、この堂々としたカシの木たちを尊敬していました。彼らは長い年月の間、ずっとここに立って、見たり経験したりしたことから数多くのことを学んできたからです。

スプリグスはたびたび、今までに見てきたことについての話をしてほしいと、大きなカシの木にねだりました。彼らは、枝の下に来ては遊んでいた子供達についての話や、はげしい風をやり過ごした時の話、何日も雨が降り続いて小川が土手からあふれ、洪水になった時の話など、その辺りの草地で起こった数々の出来事についての話をしてくれましたが、スプリグスは決して聞きあきることはありませんでした。

3本のカシの木が生えている草地は、美しくて平和に満ちていました。地面は草におおわれ、まるでやわらかい緑色のカーペットをしきつめたようでした。そして、そこらじゅうに色とりどりの花が散りばめられていました。小さくて白いスノードロップに黄色いラッパズイセン、それに赤いポピーが、春のそよ風に吹かれてなびいています。ミツバチがせっせと仕事にはげむ中、明るい色のチョウは優雅におどりながらそこらじゅうを舞っています。そんな中で、この小さなカシの若木は、何か物足りなく感じてしょうがありませんでした。

ある晴れた日のこと、スプリグスはことさらにふさぎこんでいました。「どこかちがう所に生えていたらなあ。ここはきれいだけど、何も起こらない。あまりにも平和過ぎるんだよ。」

年長のカシの木達がそれを聞き、小さな若木の願いについて、じっと考えていました。

「なあ、スプリグスや。この場所こそ、創造主がわれ達にお定めになった場所なのだとすることを、忘れてはいかんど。」一番大きなカシの木が言いました。

「分かってるよ。だけど、それでもぼくは、世界中を見てみたいんだ。ツバメさんが、今までに見たり聞いたりした場所の話をしてくれたんだけど、山や、砂漠や、ジャングルなんか、いろんな所があるんだって。それを全部見るのができたらなあ！」

すると、別のカシの木が言いました。「確かに創造主は、様々な不思議に満ちた美しい世界を造って下さった。だが、私達にはみんな、創造主の与えて下さったそれぞれの場所があるんだ。そしてここが、私達の場所なんだよ。」

「だけどぼく、小川やちょうちょや、ミツバチのブンブンという音に、もうあきちゃった。冒険がしたいんだよ！」



大きなカシの木が、低くとどろくような声で言いました。「スプリグスよ。創造主は、わし達にそれぞれ祝福された場所をお定めになった。養分があって、ちゃんと成長していける場所をな。不平は禁物じゃ。」

小川の水は、カシの木が生えている近くからわき出し、そのせいで、カシの木の根は水でたっぷりとうるおっていました。暖かい日差しは豊かにふり注ぎ、葉っぱは必要な養分をたっぷりと作ることができました。がんじょうな樹皮は、虫の攻撃から木を守ってくれていました。

時折、嵐が来ると雷がとどろき、稲妻が空いっばいに光り渡りました。けれども、カシの木に被害がおよぶことはありませんでした。創造主は、常に必要なものを供給し、守って下さっていたのです。

若木は頭をたれて、うなずきました。けれども、気分は全く晴れません。周りは美しいものばかりなのに、若木にはもはや、それらのものが目に入らないのです。



若木にとっては、秋と春が最もつらい季節でした。秋には渡り鳥がみんな、より暖かい場所へと飛び立つ準備をするからです。鳥達たちはカシの木の枝に集まって、これから出発しようとしている旅について、いろ

いろとおしゃべりします。すると、スプリグスはいっしょに行けないので、取り残されたように感じて悲しくなってしまうのです。そして春が来ると、鳥達は渡りや南の暖かい場所についての土産話を持って帰ってきました。

スプリグスは、見たことのないすばらしい地を見る夢を見ていました。金色に輝く砂でいっばいの海辺や、分厚い雪の毛布に包まれた雪山、うっそうと生い茂った草木でいっばいのジャングル、それに、見事なシロナガスクジラが海で潮を吹いている……。

(より良い世界への冒険の夢さ。ミツバチやちょうちよや小川のせせらぎがぼくを眠りに誘うような場所じゃなくてね。)と、スプリグスは思いました。

若木のスプリグスは、旅して回ることを夢に見ては、目覚めるたびに、このような静かで冒険のない場所にいることをなげきました。

けれども、ある日の朝、何かが起こりました。その朝、太陽はいつもより明るく、熱く照りつけていました。こんなに太陽の日差しが強かったことなんて、今までにありません。そればかりか、小川のせせらぎも聞こえませんが、小川がどこにも見当たらないのです。(何が起こったんだろう?) 若木は思いをめぐらしました。周りの

すべてが、今までとちがいます。

辺りを見回して、若木はあっと驚きました。いつもの草地の青々とした草ではなくて、辺り一帯が金色の砂ばかりです。植物はほとんど生えていません。ただ、小さな茂みがここそこにまばらにあるだけです。小さなスプリグスが見渡す限り、周りは砂、砂、砂ばかりです。

スプリグスは思いました。(何てヘンなんだろう。突然、すべてが変わってしまうなんて。それに、ああ、何て日差しの熱いこと!)

遠くの方に、とても変わった植物が生えています。枝の少ない木のようですが、枝には葉っぱが全然ありません。その代わりに、体中がトゲでおおわれています。

(何て変わってるんだろう! 葉っぱは、一体どこにいてるんだ?)

そういえば、自分だって秋に葉が落ちると、冬の間は枝しか残りません。まるで、死んだように見えることさえありますが、春になると葉はやがてまた生えてきます。けれども、ここはちがいました。突然やって来た新しい地は、寒くありません。事実、その反対です。草地での真夏の最高に暑い日よりも、ずっと暑いのです。

ついにスプリグスは好奇心に負けて、奇妙な植物に呼びかけました。「あのう……。あなたのような木は、今までに見たことがないんですけど。あなたは、木なのですか？」

「木だって？」 その植物は笑って言いました。「ぼくは木じゃない。サボテンなんだ。」

「うわあ、面白いですね！ サボテンなんて、今まで聞いたことがありません。」とスプリグス。

「そうかい。ぼく達は、砂漠が存在するのと同じぐらい、ずっと長くここにいるんだ。ぼく達は、砂漠に生える。ここが、ぼく達の家さ。」と、サボテンが教えてくれました。

「葉っぱはどこにあるんですか？」 若木がたずねました。

「葉っぱだって？ ぼく達サボテンには、木のような葉っぱは生えないんだ。あのなあ、砂漠はすごく暑くて、水もあまりないんだ。だから、創造主はぼく達をこんなふうにつくって下さったんだよ。ほんの少しの水でも生きていけるようにね。」

「それはすごい。」とスプリグス。「確かに、あなたの言う通り、ここはすごく暑いですね！」

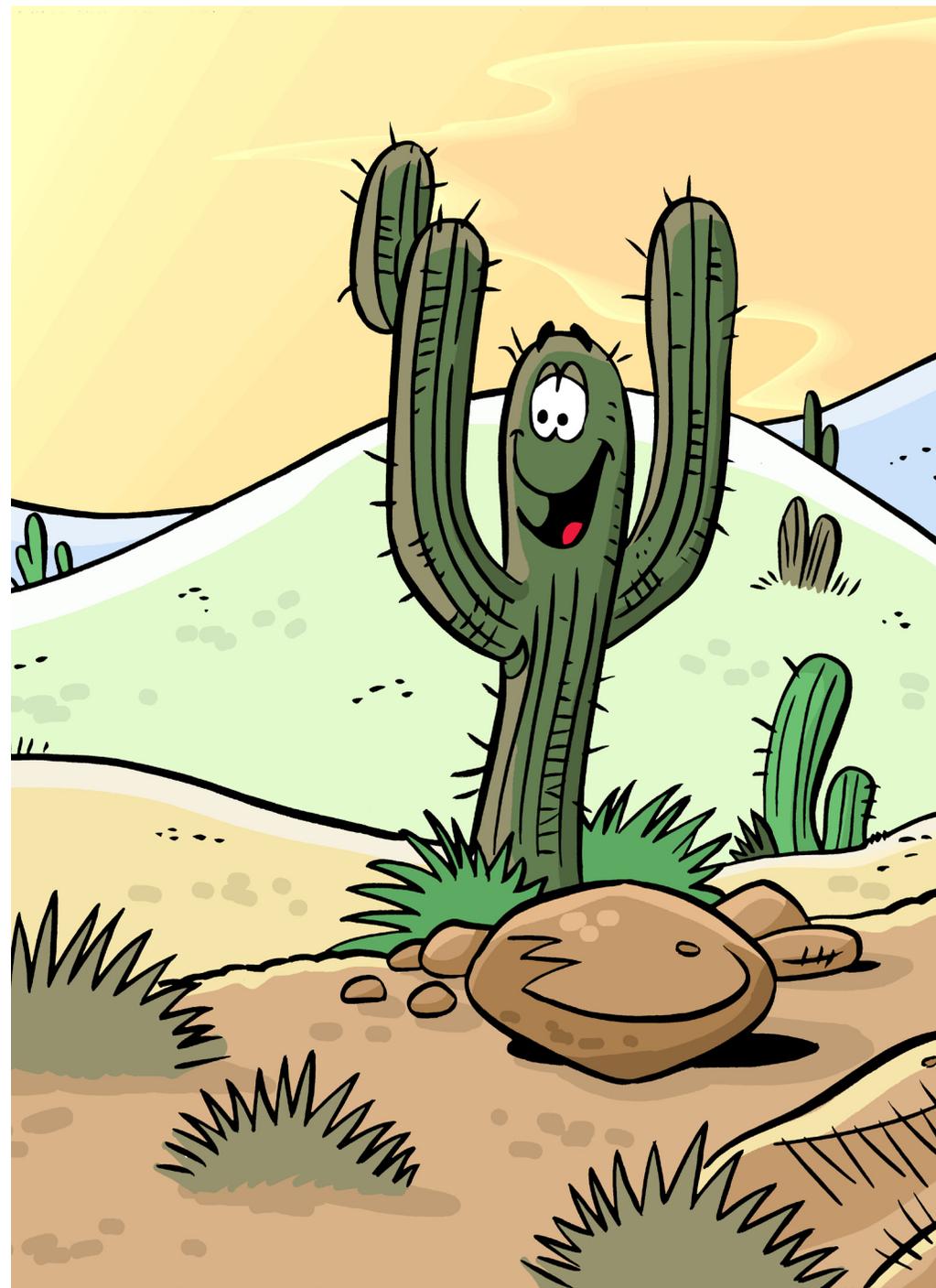
「君は、ここで何をしてるんだい？ ここいらじゃあ、見かけない顔だが。」とサボテンが聞きました。

「よく分からないんですけど……。急に、ここに現れたんです。ぼくが覚えているのは、それだけなんです。」 そう言うと、スプリグスのため息をついて、周りの新しい環境を観察し続けました。

時間が過ぎていきました。最初、若木はこの新しい場所にわくわくしていました。めずらしいものが、それはたくさんありましたから！ 小さなトビネズミは、乏しい食べ物を探し求めて地面を掘り起こしたり、巣穴に向かってちょこまかと飛び跳ねていました。はなれた所では、ミーアキャットがまっすぐに立ち上がって、天敵のハゲワシが来ないか、見張りをしていました。ヘビが、自分のすぐ前を静かにすべるようにはって行くのも見ました。スプリグスは、今までにヘビを見たことは1度しかありません。それも、ミズヘビでした。水のことを考えていると、ふとスプリグスは心配になりました。

(ここには水がない。少なくとも、目に見えるような水はね。それに、地面の奥深くを根で探しても、全然水分を感じないぞ。どうしたらいいんだろう？)

何時間もたつと、若木はだんだんと弱ってきました。葉はしおれ、茶色くなっています。しまいには、砂漠の砂の上に倒れ始めました。世界を見たいと願ったがゆえに、今は水のない見知らぬ場所にひとりぼっちなのです。あるのは、砂と焼け付くような日差しだけ……。スプリグスは、小川と草地と、それにちょうちよまでが恋しくなりました。



さて、太陽が地平線の向こう側にしずむと、寒い夜になりました。すべてが静かで動きがなく、そして、ひどく寒いのです。

「今度は何でこんなに寒いんだろう？」 スプリグスは独り言を言いました。「さっきまではあんなに暑くて、葉っぱもかかれてしまったのに、今度は凍てつくほど寒いなんて。何てヘンな場所なんだろう！ 草地にもどりたくないなあ。こんな所、好きになれそうもないや。」

すると、何の前ぶれもなく、いきなり荒々しい風が吹いてきました。それは、草地で吹いていたそよ風とはちがうし、今までに経験した嵐とさえ、全くちがってました。荒々しくすさまじい風で、何百万もの砂粒が、たけりくろうようにうずを巻きながら砂漠を横切って来たのです。一粒一粒の砂が、まるで鋭い針のように、若木のやわらかい幹につきさしました。残っていたわずかな葉っぱも、今や全部はぎ取られ、おまけに枝もへし折られてしまいました。何という苦痛でしょうか！ それから風は、始まった時と同じように、前ぶれもなく、ぴたりと止んだのです。後には、あわれな死につつある若木が残されていました。

「今のは、砂嵐っていうんだ。」 明らかに場違いの若木に何かしてやれないかと願いながら、サボテンがそとささやきかけました。

若いカシの木は、返事をする事さえできません。力つきたスプリグスは目を閉じ、眠ってしまいました。



スプリグスが目を覚ますと、新しい驚きが彼を待っていました。また元気になっていたのです！ 新しい葉が生え、根の周りにも水分を感じます。

辺りを見回すと、奇妙な光景がスプリグスの驚きに満ちた目に飛び込んできました。

「おい、こいつを見てみるよ！」 そばに立っている大きな木が声をあげました。「顕微鏡で見るような、ちっぼけな木だぞ。」 そう言うと、その木はどっと大笑いしました。

「こんなにちっぼけなやつなんて、今まで見たことねえな。」 曲がりくねったツタも、笑いながら言いました。

「ここじゃあ、まず、生きてけないね！」 別の木が、とどろくような声で言いました。

今自分が立っている見知らぬ新しい場所は一体どんな所なんだろうと、若木は辺りを見回しました。どっちを見ても、今までに見たこともないような、背の高い巨大な木ばかりです。あまりにも大きくて、こずえさえ見えません。周りはヘンな植物でいっぱいです。葉っぱが乱雑に生い茂り、高い木からは長い根がぶら下がっています。ここに生えている植物はみんな、少しでも多くの地面をわがものにしようと、生存競争を繰り広げているようです。

色とりどりの鳥達は、パチャクチャしゃべったり、さえずったり、ギャーギャー鳴きわめいたりしながら、そこら中を飛び交っています。サル達は、枝から枝へとぶら下がりながら飛び移っています。ここの植物たちはみんな、この環境で元気に生い茂り、幸せそうですが、スプリグスは自分がとても場違いで孤独に感じました。



スプリグスは、不安でこわくてたまりません。「何て変わった所なんだろう。それに、何て暗いだろう！ いつになったら朝になるのかな。」

「今はもう、お昼よ。」 そばに生えている蔓植物が、この見慣れぬ木をあわれに思っ、教えてくれました。「熱帯多雨林のここには、ほとんど日光が差さないの。周りに大きな木がいっぱい生えてるせいだね。」

「だけど、ぼくは自分の養分を作るためには日光が必要なんだ。」 スプリグスが不安そうに答えました。「そうでないと、ぼくは死んじゃうんだもの。」

スプリグスは悲しそうに、草地での暮らしを思い出していました。「うちにいた時は、水が十分あるかなんて心配したことなかったし、日差しもちょうどよかった。だけど、ここは暗いし陰気だし、ものすごくじめじめしている。ここに生えている植物はみんな、この熱帯多雨林に合っているんだ。あまり日光を必要としていないし、ぼくみたいに根を張らせるための地面もあまりいらぬ。ぼくはどうしたらいいだろう？」

今になってスプリグスは、不平を言ったり、他の場所に生えている木をうらやんだりしなければよかったと思っていました。そして、草地で大きなカシの木が言っていたことを思い出しました。「自分の周りにあるものは、なくなった時ほど感謝することは決まらないものだ。」 今になって、やっとスプリグスは、あのカシの木が言っていたことがどれだけ賢明なことだったか、分かったのです。草地では、スプリグスは美しいものや友達に囲まれていました。ミツバチやちょうちょもいたし、スズメやコマドリもさえずってくれました。草地をちょこまか走り回る小動物もいました。でも、ここではそのすべてがちがいます。

もはや お日様を見ることはできないかもしれないといった思いに、小さなカシの若木スプリグスはたえられませんでした。スプリグスはゆっくりと目を閉じ、そして深い眠りに落ちていきました。



まもなく、スプリグスは不快な冷たい風で目を覚ましました。

「今度は一体どこなんだろう？ 草地じゃないことは確かだな。だって、ここはすごく寒いもの！」 思わず、スプリグスは声を上げました。

「君がいるのは、高山の斜面だよ。」 低い声が、スプリグスのすぐ 2, 3 歩ほど上の方に生えている松の木から聞こえてきました。「私は、この山の頂に向かって並んで生えている、最後の木なんだ。」

その木の向こう側には、不毛で岩だらけの斜面が、雪の積もった頂に向かって続いていました。上の方には、岩と雪しかないので。地面は霜が張って白くなっています。

(まあ、少なくともここなら、太陽にもっと近いし、日差しをさまたげるものはだれもないよね。) とスプリグスは思いました。

「ここは、いつもこんなに寒くて雪が積もってるの？」 スプリグスは松の木にたずねました。

「いつもというわけじゃないよ。春の終わりごろから夏の始まりにかけては、短い間だけど、雪が解けて暖かくなるからね。だけど、ほとんどの季節はすごく寒いんだ。」

「そうかあ・・・。いつも冬みたいな所にずっといたいとは思わないなあ。」 スプリグスは、ため息をついて言いました。



まつ 木を よくよく 見て、若木は たずねました。「こんなに 寒いのに、どうしてそんなに 緑色で いられるんだい？ 冬には 葉が落ちないの？」

「落ちないよ。ぼくは 常緑樹だからね。」と、松の木が 答えました。「創造主が、ぼくを そのように 造って 下さったんだ。寒さや 風や 雪にも めげずに、ここで 生きていける ようにね。」

「だけど、ぼくは 松の木じゃない！ ただの 小さな カシの木なんだ。体が だんだん しびれて、力が ぬけて きたなあ。樹液も 凍り 始めたみたいだし。ぼくは、ここに いるべきじゃないんだ。草地に いるべきなんだよ！」

またもや、スプリグスは 死につつ ある ように 感じました。葉は 凍りつき、もろくなりました。

(あわれなおチビさんだ。) 松の木は そう 思って、祈りました。「創造主よ、どうか、この あわれな 若木を お助け 下さい。もとの 草地にも どれます ように。」



「スプリグスや、もう 朝だぞ！」 聞きなれた 声です。

「ここはどこ？ 草地なの？」 スプリグスは、こわくて 目を 開けられ ません。

「もちろん、ここは 草地じゃ！ おまえさんは、一体 ここが どこだ と思うと？」と、年長の カシの木が 言いました。

「草地にも どれて、ホントによかった あー！」 満面 笑顔 になった スプリグスが、声を 大にして 言いました。

「草地にも どれたって？」 別の カシの木が 聞きました。「おまえは どこに いたんだい？ 昨夜は かなりの 嵐 だったが、確かに おまえは ここに いたぞ。事実、嵐の間中、おまえは ずっと 眠った ままだった ようだが。」

「だけどね、ぼく、あちこち 旅して きたんだ！ 最初は ものすごく 暑い 場所で、サボテンや、いろんな 砂漠の 動物が いたんだよ。その次は、ヘンな 生き物が たくさん いる 熱帯多雨林 だった。太陽が ほとんど 見えない んだ。そして 最後は、高い 山の てっぺん 近くだよ。とても 大きな 松の木が 立ってた。ものすごく 寒かった んだ！」

ぼくは もう、絶対に、草地に いる ことで 不平 なんか 言わないよ。この 草地は すごく きれいで、ぼくに 必要な ものは、すべて そろってる。創造主は、ぼくを カンペキな 場所に 植えて 下さった んだね！」

「そういう ことじゃ。」 2本の カシの木が、口を そろえて 言いました。

お
終
わり

